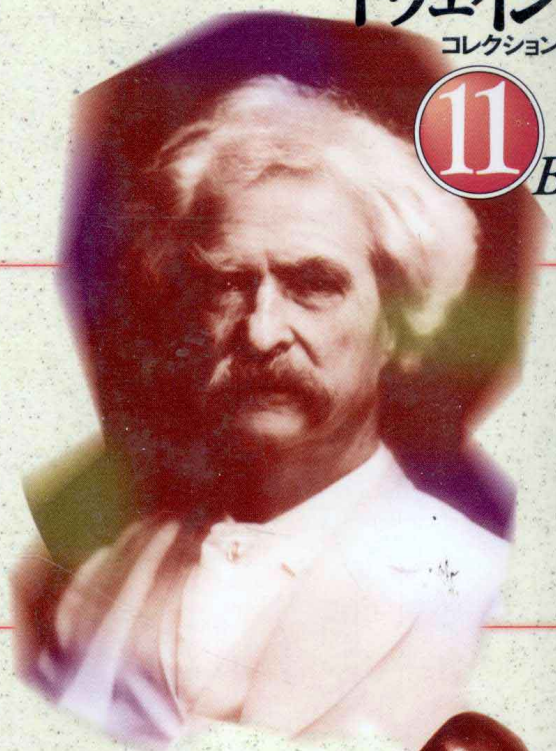


西部放浪記 下

訳★木内徹

マーク
トウェイン
コレクション

11^B



Mark Twain Collection 11^B

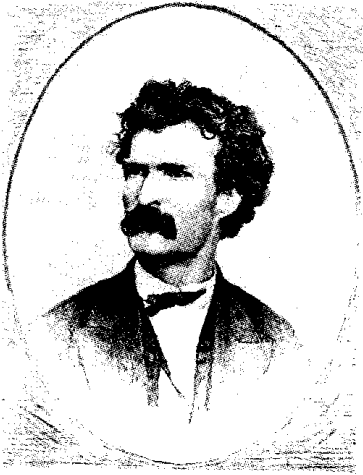
Roughing It

マーク・トウェイン
コレクション

11^B

訳★木内
徹

Roughing It
西部放浪記
下



彩流社

《訳者略歴》

木内 徹（きうち とおる）

1953年、東京生まれ。横浜市立大学卒業、早稲田大学大学院博士課程修了。

現在、日本大学助教授。専攻／アメリカ文学、アメリカ黒人文学。

訳書、マイケル・オークワード著『アメリカ黒人女性小説—呼応する魂』（彩流社）。著書『黒人文学書誌』（弓プレス）『黒人作家事典』（弓プレス）。共著、『現代英米文学の担い手たちⅠ、Ⅱ、Ⅲ』（弓プレス）

せいぶほうろうき

西部放浪記（下）——マーク・トウェイン コレクション 11-B

1998年11月25日 発行

定価は、カバーに
表示してあります

著 者 マーク・トウェイン

訳 者 木 内 徹

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03(3234)5931 FAX 03(3234)5932

組版 (有) ポイントナイン

印刷 (株) 平 河 工 業 社

製本 (有) 青 木 製 本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-532-9 C0397

目次／西部放浪記
(下)

第四十六章 成り金の旅行 13

当時の成り金——旅行者としてのジョン・スミス——突然の富——六万ドルの家——賢い電報受付係——ニューヨーク市の成り金——乗り合い馬車を貸し切る——「お乗りなせえ、ただだよ」——「一文もかからねえだよ」——「馭者さん、ちょっと待った。席を譲るだよ」——ニューヨーク市民の愛想

第四十七章 葬儀の使い 22

バック・ファンシヨ—の死——その原因——葬儀の準備——葬儀準備委員会委員スコッティ・ブリッグズ——牧師を訪ねる——スコッティは手を打てない——牧師の困惑——両者ともわかり始める——「ちんぷんかんぷんだよ」——市民としてのバック・ファンシヨ——へ母親を尖らせる方法——葬儀——日曜学校の教師としてのスコッティ・ブリッグズ

第四十八章 無法者の実態 33

ネヴァダで最初の二十六基の墓——この国の有力者——十二人も殺した男——陪審員の評決——手本となる陪審員——自分専用の墓地——無法者——彼らが殺した相手——喧嘩する気のない相手を目覚めさせる——闘わずして得た満足

第四十九章 無法地帯 40

発砲騒ぎ——窃盗と乱闘騒ぎ——手本となるべき保安官が——有名な男——通りの決闘——処罰

第五十章 豪放な船長 47

ネッド・ブレークリー船長——必要な情報を得るビル・ヌックス——ヌックス、ブレークリーの仲間を殺害——歩いて行く二人組——ヌックスをとらえるブレークリー——まず絞首刑そして裁判——説教師としてのブレークリー船長——絞首刑にあたって「創世紀」第一章が読まれる——ヌックス絞首刑になる——ブレークリーの後悔

第五十一章 文芸週刊誌の運命 55

週刊オクシデンタル——筆のたつ編集者——ある小説——才能の集結——男性と女性の主人公——自堕落な作者が関る——小説を台無しにする——きわめてロマンチックな章——恋人の決別——ヨナにも優る——失われていた詩——老水先案内人——エリー運河の嵐——水先案内人ドリンジャー——ひどい大風——危険が増す——危機の到来——奇蹟のような救出

第五十二章 銀鉱山の世界 72

カリフォルニアへの運搬——銀の延べ板——地下の鉱物——木の梓——鉱山への訪問——陥没した鉱山——一八六三年の総搬出量

第五十三章 老雄羊物語 80

ジム・ブレインとそのおじいさんの雄羊——フィルキンの過ち——オールド・ミスのワグナーさんとそのガラスの義眼——棺商人ジェイコップス——お客を待つ——ロビンズに安く売る——ロビンズは訴えて勝訴——牧師の新しい使い方——その効果——レム叔父と神の摂理——ウィーラーの悲しい運命——妻の献身——記念碑——雄羊はどうなったのか？

第五十四章 カリフォルニアの中国人 87

ヴァージニアシティの中国人——洗濯屋の請求書——模倣の習慣——中国人の移民——中華街への訪問——アー・シン、ホン・ウォー、シー・ユブの各氏

第五十五章 カリフォルニアでの生活 95

ヴァージニアシティに飽きる——古い学友——二年の借金——編集者として活動——もう少しで大儲けできるところ——ある事件——三人の酔っぱらいのこゝと——デヴィッドソン山の眺望——美しい珍事

第五十六章 サンフランシスコにて 104

サンフランシスコへ——西部と東部の景色——地上で最も暑い場所——夏と冬

第五十七章 女性のいない世界 110

カリフォルニア——女性にまみえる機会は何も——「子供じゃなかったら！」——百五十ドルの接吻——順番を待つ

第五十八章 大地震の結末 115

サンフランシスコでの生活——価値のない株——最初の地震——記者としての本能——揺れの影響——事件と珍奇な出来事——平穩を破るもの——宿泊客とメイド——見習うべき服装——地震の牧師への影響

第五十九章 極貧の中で 123

ふたたび貧乏に——生涯こそこする——模範的な集金人——貧困時は友を必要とする——形式的な請求——幸運の連続——十セント硬貨発見——富の比較——二回の贅沢な食事

第六十章 鉾穴鉾夫の生活 130

旧友——教養ある鉾夫——鉾穴採鉾——富の興奮

第六十一章 トム・クウォーツという猫 135

ディック・ベーカーと猫——トム・クウォーツの特技——探索——戻ってきた
ときの様子——偏見を持った猫——空っぽのポケット（鉾穴）と放浪の人生

第六十二章 ヘこまされた提督 141

サンドイッチ諸島へ——三人の船長——老提督——毎日の習慣——よく闘った
戦場——思わぬ敵——圧倒された提督——英雄の勝利宣言

第六十三章 サンドイッチ（ハワイ）諸島の奇習 152

諸島への到着——ホノルル——そこでわたしが見たもの——住民の服と習慣——
動物王国——果物とすばらしい効用

第六十四章 サンドイッチ諸島の探索 157

旅——フィリップ船長とその装備——馬の背に乗って——悪意ある馬——自然
と人工——興味深い廃墟——宣教師への賛美

第六十五章 サンドイッチ諸島の歴史 164

興味深い記念品と遺品——恐ろしい飛び降りの伝説——鑑賞する馬——貸し馬業者とその弟たち——新しい手口——干し草業者——馬が好きな人にとってはいい国

第六十六章 サンドイッチ諸島の風俗 171

土曜日の午後——サンドイッチ諸島の陽気な娘たち——ポイ商人——大縁日——原住民の踊り——教会の参加者——猫と高官——驚くべき発見

第六十七章 サンドイッチ諸島の政治 177

島の政府——大統領が見たもの——敵のために祈る——女権——ロマンチックな服装——鯨のための祈り——服装の希望——正装——パリの服装ではなく——帝国気取り——高官と外交官——圧倒的に派手な服装

第六十八章 王族の葬儀 186

王家の葬儀——列の順序——派手さと儀式——自立つ違い——病気の君主——人身御供——埋葬の騒ぎ

第六十九章 船旅 198

へふたたび海の上に——うるさい乗客——静かな乗客も——月の光——果物と農園

第七十章 蕪への愛 204

疲れた様子——ビーズリー夫人とその息子——蕪への思い——ホーリス・グリーリーからの手紙——怒りの返信——訳された手紙、だが遅かりし

第七十一章 キャプテン・クック記念碑 213

ケアラケクア湾——キャプテン・クックの死——その記念碑——その建立——帆船に乗って

第七十二章 サンドイッチ諸島の宗教 219

ニューイングランドの若いカナカ人——亡霊によって建てられた寺院——女性の水浴び——見張りに立つ——女性とウィスキー——宗教のための闘い——宣教師の到着

第七十三章 不可侵領域 225

原住民のカヌー——波乗り——保護地——どう建てられたか——女王の岩——

珍しいもの——化石化した溶岩

第七十四章 火山 233

火山への訪問——噴火口——火の柱——すばらしい光景——火の湖

第七十五章 噴火口 240

北湖——火の泉——燃える溶岩の筋——津波

第七十六章 馬の悪癖 245

思い出——もう一つの馬の物語——牛乳運搬から引退した馬に乗る——ピク
ニック——ホレアカラ死火山——ベスピアス山との比較——噴火口のなかの景
色

第七十七章 相手にせぬ方が無難 253

奇妙な人——一連の物語——嘘つきの悲しい運命——狂気の証明

第七十八章 講演家としての出発 260

サンフランシスコへの帰還——船の楽しみ——講演の準備——貴重な援助を確
保——最初の試練——聴衆はよろこぶ——へ終わりよければすべてよし

第七十九章 大きな教訓 266

強盗——苦境——大きな冗談——カリフォルニアとの別れ——ふたたび故郷へ
——大きな変化——教訓

付録 A

モルモン教史の概略 275

付録 B

マウンテン・メドウズの大虐殺 280

付録 C

失敗した恐ろしい暗殺に関して 285

無から有を生み出した最初の作品
ヘンリー・B・ウォナム 309

訳者あとがき 332

西部放浪記
(下)

原註の表記は短いものは〔原註…〕、長いものは*印で表記し、訳註は（ ）で示した。

第四十六章 成り金の旅行

当時——つまり〈好景氣時代〉——には成り金があった。鉾山で大当たりがあれば必ず一人や二人はでた。そのうちの何人かを思い出す。彼らにはいがいのんきで、あくせくしない人たちで、多くの市民は彼らと同じくらいその富によって恩恵を受けていた——場合によってはたぶんもっとだろう。

馭者である二人の従兄弟が、ある人のために運搬を行ったが、現金三百ドルの代金の代わりに分割した銀鉾のわずかな一部を受け取らねばならなかった。彼らは第三者にその銀鉾を開発するのに三分の一を与え、自分たちは馭者の仕事をつづけた。しかしすぐその必要はなくなった。十か月後にその鉾山は負債から脱して、月に八千ドルから一万ドル——ざっと年に十万ドルの利益をあげるようになった。

ネヴァダが輩出した最も初期の成り金の一人は懷に六千ドル相当のダイヤを持ち、思うようにすばやく金を使えないので不満だとこぼしていた。

もう一人のネヴァダの成り金は、しばしば月額一万六千ドルに達する収入を誇っていた。いまはそれだけの鉾石を産出するが、最初にこの地方へきたときは、一日四ドルでいかにひどい思いで働いたかを話したがったものだ。

この銀とセイジブラッシュばかりの州には幸運児——極貧から一晩で金持ちになった——がもう一人いる。金持ちになった直後に、政府高官になれば十万ドル出してもよいと言ったが——失敗した。というのは彼の政治はその銀行預金と同じくらい、いっどうなるかわからないものだったから。

またジョン・スミスという人がいた。彼は善良で、正直で、心あたらない人物だった。低い階層の生まれ、育ちで、おどろくほど無知だった。馭者をしていて、小さな牧場を持っていた——この牧場は快適な暮らしができるだけの収益があった。わずかな干し草しか産出しなかったが、少なくとも産出したものは市場で一トンにつき金貨で二百五十ドルから三百ドルにはなった。やがてスミスはその牧場の数エーカーをゴールドヒルの小さな未開発の銀鉱と交換した。その銀鉱を発掘し、十本の圧断機がある小さくて控え目な精練所を建てた。十八か月後に、鉱山からの収入が相当な額に達したので、彼は干し草業界から引退した。ある人は彼の月収が三万ドルといい、またある人は六万ドルとも言う。スミスはとにかく大変な金持ちになったのだ。

それから彼はヨーロッパへ旅に出た。戻ったときにはイギリスで見た上等な豚や、スペインで見た豪華な羊や、ローマ近郊で見つけた上等な家畜のことを飽きもせず話した。旧世界の驚異に感銘し、誰にも旅行を勧めた。彼は、人間は旅行してみなければ、世界にはどんな驚くべきことがあるか想像もできないと言った。

ある日、船の上で船客たちから五百ドル集め、それがこの船のこれからの二十四時間の航行距離を当てるものになるという、無尽講のようなものが開かれた。翌日昼近くになって、各船客の出した数値が封印された封筒に入って係員の手のなかにあった。スミスは穏やかで幸せそうにしていた。彼は機関士に賄賂(わいろ)をあげていたからだ。しかし別な人がその賞金を手にしてしまった！ スミスは言った。

「ちょっと待て、それはおかしいじゃないか！ あの男の予想は、おれが予想した距離より二マイルも多かったじゃないか」

係員は「スミスさん、あなたはこの船の上の誰よりも多く予想してしまいましたよ。昨日は二百八十八マイル航行したんですから」と言った。